

I 学校の概要

個を活かす協働的な学びの推進モデル校事業

高松市立香川第一中学校

◆児童生徒数及び教員数

○生徒数

第1学年	第2学年	第3学年	特別支援	全校
5 学級 173 名	5 学級 176 名	6 学級 194 名	4 学級 11 名	20 学級 554 名

○教員数 53 名

◆学校の特徴

本校では、生徒の多くが部活動に熱心に取り組んでおり、地域をあげて盛んなハンドボール競技をはじめ、バレーボール部やバドミントン部など、全国大会に度々出場する部もある。地域の方や保護者の部活動に対する期待も大きく、学校教育活動にも概ね協力的である。生徒は、生徒会の決めたスローガン「努力・信頼・思いやり」のもと、前向きに、活気ある学校生活を送っている。

本校の生徒の多くは、素朴で人懐こく、教員の指示を素直に聞き入れて行動しようとする。行事等に友人と協力して一生懸命に取り組み、協働することに価値を見出している。しかし、その一方で、少しでも困難さを感じるとすぐに諦めてしまう面があり、粘り強く取り組んだり、軌道修正してよりよい方法を見つけたりすることに課題が見られる。また、集団の中で自信をもって自分の意見を言えない生徒も増えており、そのため、集団で活動することにストレスを感じたり、自分を認めてもらえないと思ったりして、グループやペアで活動しても効果が上がらないといった課題がある。

II 研究主題等

研究主題

自他のよさを認め、主体的に未来を切り拓く集団づくり

—みんなが楽しいと思える学校づくりを基盤とした生徒指導の推進—

◆研究主題設定の理由

本校は平成29年度からユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業改善に取り組み、学ぶ意欲をもって主体的に学習に向かう生徒の育成に取り組んできた。その結果、県学力状況調査の生徒質問紙における「授業が楽しいと思う」や「授業の内容が分かる」の質問に対し、6割を超える生徒が肯定的な回答をした。

前年度からは、生徒指導の三機能である「自己存在感の育成」「共感的人間関係の育成」「自己決定の場の設定」を意識して授業を組み立てることを研究の柱とし、実践を行ってきた。しかし、「学級で安心して自分の意見を言うことができる」「学校に行くのは楽しいと思う」という質問に対する肯定的回答が県平均を下回り、学校生活において、生徒が他と受容的に関わることに課題があることがうかがえた。

そこで、学力を意識せず自分事として話し合える課題を学級で話し合う「一中学級力向上プロジェクト」

を通して、生活を改善していくと同時に、話し合いが円滑に行われるような関係をつくることにする。その上で、今まで本校が取り組んできた「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業」で基礎・基本の定着を図りつつ、自己存在感を高め、主体的・協働的に課題解決し、学び続ける生徒を育成したいと考え、研究主題を設定した。

◆研究内容及び方法

(1) 生徒指導の三機能を働かせた受容的風土を育てるための工夫

- 各教科で下記の①～③の観点において授業で行える工夫を考え、実施する
- 「一中学級力向上プロジェクト」で生徒を主体とした問題解決学習を実践する
- 各教科の授業に「一中学級力向上プロジェクト」の「問題をとらえる」「意見を出す」「交流する」「練り上げる」「選択する(実践する)」「振り返る」といった一連の学習の流れを取り入れる
- 生徒会が中心となり、学校生活の問題を解決し改善していく取組を実施する

① 自己存在感を高めるための工夫

- ・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業（ICT機器等の効果的利用）
- ・授業で生徒一人一人を生かす工夫（Q-Uアンケート調査の分析をもとに）

② 共感的人間関係を築くための工夫

- ・協働的・対話的な学びを取り入れる
- ・ピア・サポートを活かす

③ 自己決定の場を作るための工夫

- ・「学習課題」の工夫と「振り返り」の内容の研究

(2) 組織作り

授業研究部会	なかまづくり部会 特活部会 (学級力向上部会)	
<ul style="list-style-type: none"> ・学ぶ意欲を育て、「分かった」「できた」「楽しい」と思えるよう、生徒指導の三機能を生かした授業づくりを工夫・実践・評価する。 ・考える場、表現する場、認める場の意図的な設定や、活動、生徒への配慮等の支援を行う。 ・「学習内容」と「主体的な学び」の両面からの「振り返り」の研究を行う。 ・コロナ禍においても生徒たちが学びあえるための授業でのICT機器の利用についての研究推進を行う。(ギガ推進部会) 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の実態調査・分析・追跡調査 ・Q-U アンケート調査から変容を探る。 ・特別の教科「道徳」の授業で道徳的価値について主体的に考え議論できる学習を研究する。 ・ピア・サポートやストレスカードを利用した社会性育成や対立解消スキルトレーニングを通して、ほつとできる集団づくりを推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒一人一人が安心して楽しく学校生活を送るための学級力向上プロジェクト指標(一中モデル)を作成する。 ・生徒会が中心となり、生徒自らが指標を生かして学級力を可視化分析し、改善に自立的に働きかけるような学習を行う。 ・生徒会活動の活性化を生徒の意見を反映させながら行う。

Ⅲ 研究実践

◆指標設定と達成に向けた取組

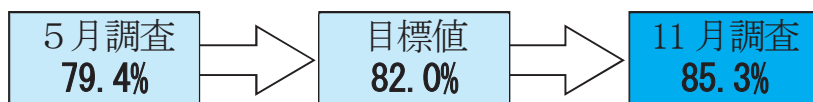
1 (生徒アンケート) 学級では、安心して自分の意見を言うことができますか。

指標 「③どちらかというといいえ+④いいえ」の合計



2 (教師アンケート) 生徒の実態を把握し、授業のどの場面でどのように活躍させるか、工夫していますか。

指標 「①している+②どちらかというとしている」の合計



指標の達成に向けた実践

1 生徒理解につながる教員研修

(1) ピア・サポート研修

外部から講師を招き、教員がピア・サポートの研修を受け、効果を理解した上で手法を学習した(図1)。各学年で年間計画を立てて実施し、受容的風土の醸成を図った(図2)。実施後の生徒の振り返りには「今まで話したことのない人と一緒にできて楽しかった。」「ほめてもらえて、ほっとした。」といった感想が多く見られた。教室の中での生徒の表情が和やかになっていると感じている。



図2：ピア・サポート授業

第2学年「ピア・サポート」授業

新しい学級で人間関係づくりをするために「ストロー渡し」を行った。二人、三人と人数を増やし、相手と呼吸を合わせながら、あたたかい言葉をかけあって実践した。自然と笑みがこぼれ、和やかな雰囲気に入れ、居場所づくりができた。

(2) Q-U アンケート調査の分析

集団の中で生徒一人一人がどのような立場にいるのかを理解するのが「Q-U アンケート調査」である。まず、Q-U アンケート調査の概要と分析方法について全教員で研修を行った。6月、11月に生徒が受けたQ-U アンケート調査の結果を各学年の教員が7月と12月に分析し、気になる生徒に対しての改善案を考え、授業や学校生活で実践し、生徒の変容を確認している。

(3) 道徳教育の推進

なかまづくりに関わる内容項目を各学年共通の重点内容項目として、指導を行っている。生徒の発言に対しても受容的態度で関わるように配慮している。

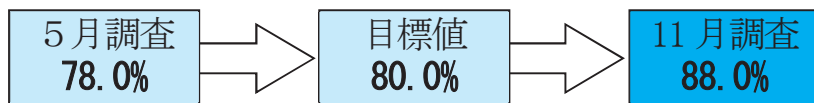
3 (生徒質問紙) 普段の授業では、学級の友達との間で話し合う活動をよく行っていると思いますか。

指標 「①思う+②どちらかといえば思う」の合計



4 (生徒質問紙) 学級の友達と話し合う活動を通じて、自分の考えを広げたり、深めたりすることができていますか。

指標 「①できている+②どちらかといえばできている」の合計



指標の達成に向けた実践

2 「一中学級力向上プロジェクト」

生徒の学力差に左右されることなく、自分事として考えられる課題を話し合う場として、「一中学級力向上プロジェクト」(図3)を設定した。「一中学級力向上プロジェクト」とは、よりよい学校(学級)にするために、自分たちの生活を見直し、改善するにはどうすればよいか、学級で考え、実施していくプロジェクトである。学期に一回、振り返りとしてアンケートを実施し、その結果をもとに、再度話し合いを行って対策を練り直していく。

生徒たちはこの活動を通して、課題に対する自分の意見をもつこと、相手の意見を尊重して聞くこと、決議の際は、多数決で決定するだけではなく、折り合いをつけたり合わせたりしてよりよい案に練り上げることの大切さを感じていた。また、学級の友達と意見を交流させた学級会後の感想では、「自分では考えられなかった対策案が友達との話し合いで出た」「話しているうちに、いろいろなアイデアが出てきた」など、考えの広がりや深まりが見られた。



図3: 「一中学級力向上プロジェクト」の流れ

4 学級活動の流れを授業に取り入れた授業改善

生徒が自らの学びを確認し、調整して、新たな課題を見つけることを目的とし、各教科で授業後や单元ごとに学習を振り返る活動を実施した。学級活動では、「一中学級力向上プロジェクト」での活動の振り返りを行い、自分たちの活動状況を評価するだけでなく、これからの生活を改善するためにどうすればよいか、さらに次の活動につなげる振り返りが行えた。それを受け、各教科でも「一中学級力向上プロジェクト」の流れと同様に、「課題をつかむ」「意見を出し合う」「比べ合う」「まとめる」「振り返る」といった一連の学習過程を踏まえて授業を行えば、生徒も取り組みやすいのではないかという仮説を立て、各教科で実施した。香川大学教育学部准教授 岡田涼先生に授業を見ていただき、助言を受け授業改善に生かしている（図7、図8）。

学習内容及び学習活動	教師の支援及び指導上の留意点
1 前時の内容を振り返る。 (1) アンケート結果を確認する。 (2) ペアで本文の音読をする。	・前時にとった「中学校生活について」のアンケート結果を提示することで、生徒の活動に対する意欲を高めたり、思考の幅を広げたりする。 ○本時の学習内容に関連する文をペアで音読することによって、既習内容を思い起こすことができるようにする。
2 本時の学習課題を把握する。 (1) ALTからのメッセージ動画を見る。 (2) 学習課題を設定する。	・ALTからのメッセージをもとに、本時の学習課題を考えられるようにする。
思い出に残った学校行事について、キアン先生が(参加したくなる)ように伝えよう。	
3 発表までの方法を確認する。 (1) 発表原稿の流れを理解する。 (2) 例を見て、どのような表現があるかを確認する。(音声も含む)	・教師の実体験や諸外国の中学校生活を紹介することで、生徒の思考の幅が広がるようにする。 ・生徒が使えそうな表現や語句を例に取り入れることにより、後で参考にできるようにする。 ・語句や表現がわからない場合にどうすればよいかを活動前に確認することで、英語が得意でない生徒も活動を続けられるようにする。
4 発表原稿を作る。 (1) やさしい日本語でのメモを書く。 (2) 英作文をする。	・生徒が次時の活動で自信をもって自分の意見を発表できるように、ワークシートを回収し英文を添削することを伝える。
5 発表原稿を共有する。 (1) たてよこのペアで原稿を読み合う。 (2) アドバイスをし合う。 (3) やさしい日本語で文を追加する。 (4) 付箋を使って英作文を再構成する。 (5) 英作文を終えた生徒は、タブレットの音声認識機能を用いて発表の練習をする。	○ペアでアドバイスをし合うことで、オリジナルの文を加えるなど、自分の原稿を再度練直すことにつなげる。 【評価②】聞き手を意識した発表となるように、自分の体験を整理し、簡単な語句や文を用いて伝え合うことができる。 【評価③】聞き手を意識した発表となるように、自分の体験を整理し、簡単な語句や文を用いて伝え合おうとしている。
6 本時の振り返りをする。 (1) 級友のアドバイスから得たものを共有する。 (2) 使いたいと思った語や表現を書く。	○自らの変容に気づくことによって、級友と学び合うことのよさを感じられるようにする。 ・生徒の実態に応じたフィードバックを行うために、振り返りにおいて、生徒が活動の中で使いたいと感じた表現や語句を書くように伝える。 ・言語活動について教員から肯定的なコメントをすることで、今後の課題や学習意欲につなげるようにする。

学活の流れを意識した授業構成（生徒指導の三機能）

- 前時の「振り返り」
- 自分事としての学習課題の設定
- 既習事項の確認（ペア）
（共感的人間関係の育成）
- 課題解決（個人）
スモールステップの課題
様々なツールを選択しての課題解決
（自己存在感の育成）
- ペア・グループで意見を出し合い 比べ合う
（共感的人間関係の育成）
- 全体でのまとめ
課題のまとめ（個人）
（自己決定の場）
- 振り返り



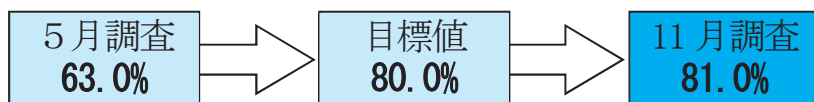
図7：ペアでアドバイスする生徒



図8：授業討議の様子

5 (生徒質問紙) 授業の最後に、学習内容を振り返る活動をよく行っていると思いますか。

指標 「①思う+②どちらかといえば思う」の合計



指標の達成に向けた実践

5 生徒指導の三機能を育成する手立てとしての「振り返り」

「一中学級力向上プロジェクト」では、学級会で決定した内容を一定期間実施し、その成果を自分たちで振り返る(図9)。この振り返りを分析して、「何が足りなかったか」「今後どうすれば良いか」を考えるPDC Aサイクルを行っていく。このPDCAサイクルの流れを教科指導の場にも取り入れている。生徒指導の三機能である「自己存在感を高めるための手立て」「共感的人間関係を築くための手立て」「自己決定の場をつくる手立て」として授業の「振り返り」を次のように活用している。

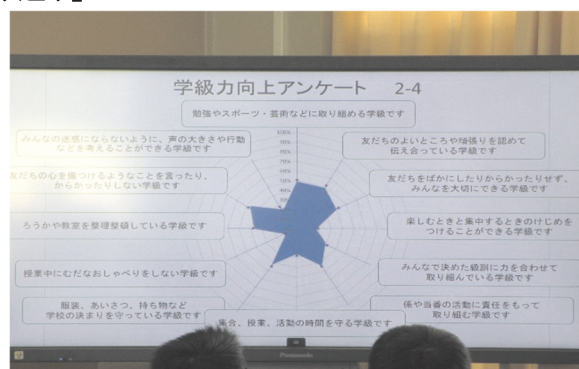


図9：一中学級力向上プロジェクト「振り返り」

数学科では、毎時間、数学的な語句を用いてその時間の学習内容を振り返りカードに記入させている(図10)。カードに自分の学びを毎時間記入することで、生徒は理解の深まりを実感するとともに、次への学びの意欲を高めることができている。

項目	回数	振り返り内容
7/21 多項式の加減	3	多項式の加減が分かった。2次式・3次式にそれぞれ加減して、1次式・2次式・1次式・0次式(定数項)に分けて、係数を足す。係数は符号に注意して加減する。係数は符号に注意して加減する。
7/22 多項式の乗法	2	乗法にしたプリントで見て、計算ミスは減った。
7/23 多項式の除法	1	多項式の除法(長除法)のやり方を覚えた。7月23日の授業で、7月23日の授業で覚えた。
5/27 3つの式(線形方程式)の値	2	式で代入して入る多項式の値を計算できるように練習した。
5/16 多項式の利用	6	多項式の利用は、多項式の利用(多項式の利用)の練習をした。

図10：数学用語を用いた「振り返り」

音楽科では、生徒たちは自分たちの合唱の課題を解決するために、「曲の構成を理解して、山を表現しよう」という学習課題で授業に取り組んだ。授業では、曲の諸要素や歌詞に注目させて曲の構成を捉えさせた。その上で、生徒は曲の構成を生かすためにどのように演奏すればよいかグループで工夫点を出し合い、練習を行った。授業の終末では、合唱を録音し、前時の録音演奏と聞き比べをして振り返りを行った(図11)。

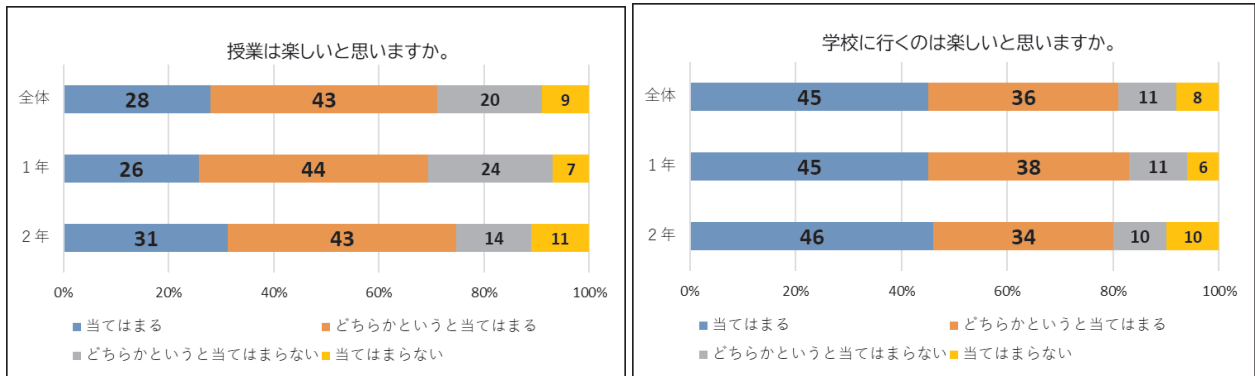


図11：本時の学習の振り返りとしての合唱

このように、教科の特性に合わせた振り返りを行っている。また、学習内容を振り返るだけではなく、学習の仕方(「どうすれば、失敗を防ぐことができたのか」や「誰に何を聞けば時間内に解決できたのか」、「次に同じように困ったとき、どうすればいいのか」等)についても振り返りを行うようにした。このように各教科において生徒が学び方を学ぶことができるような取組を積み重ねることで、安心して学習に取り組むことができ、このことが、学習意欲の高まりにつながると考えられる。

IV 研究の成果と課題

◆ 研究の成果



安心して意見を出し合える土壌づくり、「一中学級力向上プロジェクト」の推進による自分たちで自分たちの学校生活をよりよくしていこうとする活動、「生徒指導の三機能」を授業に生かす手立てと学級会の流れを教科指導に生かす取組を教員集団が意識して取り組んだ。その結果、「県学習状況調査 生徒質問紙」と同時期に行ったアンケート結果では「授業は楽しいと思いますか。」「学校に行くのは楽しいと思いますか。」のいずれの項目でも肯定的回答が70%を超えており、自己肯定感、共感的人間関係を高めるとともに、学習面にもよい影響を与えていることがうかがえる。

◆ 今後の課題

「県学習状況調査 生徒質問紙」の「授業の内容がどの程度分かりますか。」に対する否定的回答が半数を超えている。

特に、課題を難しいと感じると、挑戦する意欲が低下する兆候がある。難しい課題に立ち向かう姿勢を育てるために、少しずつ段差を乗り越える経験をさせること、生徒が想定していないような壁になるような発言を教師があえて投げかけることを通して代案や想定外の場合にどうするかを考えさせる練習・訓練が必要だと考えられる。ピア・サポート等の自他のよさを認め合う活動で自己肯定感を養い、学級活動や授業、生徒会活動等の学校生活の場で課題を乗り越え、成就感につながる活動をさせることが必要だと考えている。

また、学習内容を定着させるための今後の対策として、次の4点を考えている。

- 1 課題解決に必要な基礎的な力が個々に備わっていない状態では、学び合いをしても、意見を深めたり力を高め合ったりすることが難しい場合もある。そこで、学び合う前に必要な教科の知識・技能を身につけさせたい。
- 2 教科指導の場でも、「一中学級力向上プロジェクト」を生かし、「課題をつかむ」「意見を出し合う」「意見を比較し、考える」「振り返る」という一連の流れを教員が意識して継続して行うことで、生徒のスムーズな課題解決につなげたい。
- 3 「振り返り」には「学習内容」として何が分かったかということだけではなく、「間違っただのはどうしてなのか」「次にその間違いを防ぐためにはどうすればよいのか」などの「学び方」について生徒に振り返らせ、汎用的な学びにつなげさせたい。
- 4 生徒に3年間を見通した教科の力を身につけさせるため、今一度、各教科で「評価と指導の一体化」を考え、一中独自の指導と評価の対照表を作成したい。

昨年度からの2年間の研究を通して、教員集団と生徒の確かな変容を感じている。今後も、新たな課題に対し教員で協力しながら生徒の育成のために研究を進めていきたい。

